

[図画工作・美術]

小学校図画工作科における児童の思考を捉え高める手立て

－自己調整学習の導入により自己の表現を追求する姿を目指して－

澤田 直明*

1 はじめに

(1) 児童の“内なる声”を聞くことの難しさ

図画工作科の授業において、教師が感じる指導の困難さは、「どのように教えるべきか」という具体的な指導方法の模索や、「何を表現しているのか」といった児童の制作意図の理解、さらには「どのように評価するか」といった適切な評価方法の探求など、多岐にわたる。教師は、児童に表現したいという意欲や目的をもたせ、作品を制作させる。そして、その制作過程や作品から、児童が表現に込めた“内なる声”を聞き取り、評価する必要がある。特に児童の思考を捉えることに関しては、一層の難しさが伴う。児童の意図や思考は、必ずしも絵や形に明確に表れるわけではないため、慎重な観察や児童との対話が不可欠である。しかし、「この子は、どういう世界を表現したいのだろう」「この材料を選んだ背景には、どういった意図があるのだろう」などと思いを巡らせても、児童の思考の全てを正確に読み取って理解することは、現実的には非常に難しい。ある児童に注目している間に、クラス全体の児童の様子を把握できず、作品の完成時期を迎えてしまうこともしばしばである。

(2) 表現と鑑賞の一体的指導の重要性

図画工作科の授業で児童の豊かな表現を引き出すためには、児童一人一人が自分なりの表現を追求し、表現活動や鑑賞活動に取り組むことが求められる。学習指導要領(2018)では表現と鑑賞について「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動である」とされている。したがって表現と鑑賞は切り離して考えず、互いに補完し合いながら力を高める指導が求められる。しかし、実際の授業の場面では表現と鑑賞の活動が分断されることが多い。作品完成後に制作時の工夫や苦労を振り返らせたり、表現技法に優れた作品を参考にさせたりすることで鑑賞活動を行ったとみなされがちである。その結果、児童が自分の表現方法を探求したり、必要な情報を収集・活用したりする機会が限られてしまう。このような状況では、児童が自分の思いを十分に反映した納得のいく作品を作ることが難しくなり、表現活動を心から楽しむことができない場合がある。

市川(2020)は、「教師中心の指導性の強い、作品至上主義的な授業は、大人から子どもへの『美しさ』『よさ』『面白さ』といった価値観の押し付けにしかならず、主体的な学習意欲は生まれにくい」と述べ、児童が主体的に発想や構想を広げるためには、児童自らが表現し、表したいという意欲をもつことが大切だと主張している。指導者が、作品の出来栄や制作後のワークシートの記述といった、いわゆる結果のみを重視して評価すると、児童は自己を振り返ったり、次の計画を立てたりする経験が不足する。その結果、自己決定ができず、「先生、これでいいですか?」「どうすればいいですか?」と指示を仰ぐ場面が増えてしまう。このような状況では、図画工作科の目標である「つくり出す喜びを味わう」を達成することは難しい。

(3) 図画工作科における自己調整学習の必要性

中央教育審議会の「教育課程部会における審議のまとめ」(2021)では、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」とに整理されており、「指導の個別化」については、「全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの『指導の個別化』が必要である」と記されている。児童が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導するこ

*十日町市立西小学校

との重要性が指摘されているのである。

養手（2021）は、著書の中で「自己調整学習とは、一言で言うと、『独立して学ぶ力』を身に付ける学習であり、誰かに押し付けられたり強制されたりしなくても主体的に学び、自らを成長させることができる力が求められている」と述べている。具体的には、児童が自分で学習を計画し・実行し、その過程を振り返りながら改善する方法である。課題に取り組みながら、進捗を確認し、適宜学習方法に修正を加える。このプロセスを通じて、児童は自分の学習スタイルやペースを理解し、より効果的な学び方を身に付けていく。自己調整学習は、児童の自主性や問題解決能力を育み、深い理解と創造力の向上にも寄与する。その中で、教員はアドバイザーとして、児童が自ら学習を進められるよう支援する役割が求められるのである。

図画工作科において、教育の支援を必要とする子とは、単に知識や技能が不足している児童に限らない。より良い表現方法や創造的な思考を追求し、さらに高めようとしている児童も含まれる。つまり、全ての児童が、それぞれのペースで成長し、表現力を磨くためには個別の支援が必要であり、全児童がこの「支援の必要な子」に該当すると言えるのである。全ての児童に個別の支援を適切に行うためには、児童一人一人に自己調整学習のやり方が定着していることが不可欠であると考ええる。

（4）高学年児童の表現に対する苦手意識

4月に現在の学級（5年生）の担任となった際、図画工作科に対する意識調査（表1）を実施した。結果から、多くの児童が苦手意識を抱いていることが分かった。嫌いな理由としては、「上手く表現したいけれど、できない」「絵が下手」「何を作ったらいいか分からない」「周りの子の作品と比べてしまう」「通知表の成績が悪い」などの声が挙がった。これらを大別すると、「思い通りに表現できない」ことや「アイデアが浮かばない」ことが、苦手意識の主な要因である。

〔表1：図工に対する意識調査（24名）〕

	1とても嫌い	2嫌い	3好き	4とても好き	平均値
図工は好きですか？	3	8	9	4	2.58
絵を描くことは好きですか？	2	11	9	2	2.45
ものを作ることは好きですか？	3	9	7	5	2.58

また、鑑賞の際に「技術的に上手い・下手だ」という評価（印象）を受けることも、苦手意識に繋がる要因である。梅澤（2008）は、制作過程で自信を喪失する原因を、「技術的に高度で上手な作品」「本物みたいな写実的な作品」を作ることが到達点となり、作品を作る自分と、その作品を見るもう一人の自分との間に生じる「ギャップ」によるものだと述べている。苦手意識を解消するためには、児童が自分の表現に自信をもてるよう、適切なサポートを行うことが不可欠である。児童の工夫や試行錯誤を認め、成功体験を積み重ねる指導が重要となる。

2 研究の目的

本研究の目的は、作品制作の過程で児童の思考を的確に捉え、児童が自らの表現を追求し続ける姿を育む指導法を探ることである。具体的には、制作過程に「制作レポート」という形式で「自己調整学習」を導入し、児童が制作中に自身の思考を整理し、表現力を高める手法を検討したり、表現に対する苦手意識を解消することへの効果を検証したりする。また、教師が直面する指導の困難さ（児童の意図を理解することや適切な評価方法）を解決するために、自己調整学習がどのように寄与するかを明らかにすることも目的としている。

3 研究の仮説

制作過程に「自己調整学習」を導入することで、児童は自分の制作を振り返り、思考を整理しながら自己評価を行うことができる。これにより、児童は「自分の思い通りに表現できた」「次はこうしてみよう」と自分の表現に自信をもつと同時に、苦手意識を解消し、次の制作に向けた目標を明確にする姿が見られるようになる。また、教師は児童の自己評価を基に、より的確な支援が提供できるため、児童の学習の質の向上が期待される。

「自己調整学習」は、児童が自分の学びを計画し、実行し、その過程を振り返って改善するプロセスであり、これによって自主性や問題解決能力が育まれることが明らかになっている。特に制作活動では、児童が制作過程を振り返り、思考を整理することで表現に自信をもち、次のステップに向けた意欲が高まることが期待される。また、教師にとっては、児童の自己評価を通じて意図や思考を把握しやすくなり、的確なフィードバックが可能になる。こうした指導法は、児童の表現力向上や自己理解の深化に寄与すると考える。

4 授業実践

(1) 題材名：「のぞいてみると…」(立体) 全6時間

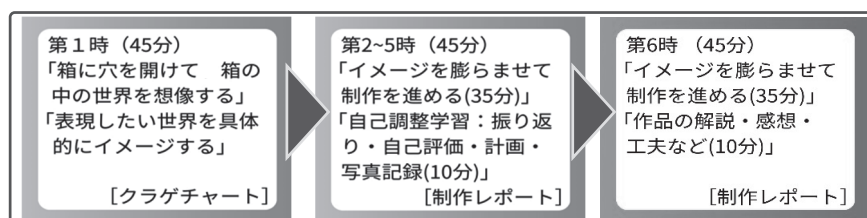
(2) 題材について

本題材は、「穴を覗く」という行為を通して想像を広げ、学んだことを生かして自分の思いを形にすることを目的としている。箱に開けた穴から見える世界を表現し、光が空間に差し込む様子やその見え方から得た感覚に基づいて、発想や構想を練る。また、形や色、材料の特徴を考慮して構成を考え、これまでに身に付けた経験や技能を活かして、表現方法を工夫する力を育てる。

(3) 自己調整学習としての制作レポートの作成

レポートを作成することで、児童が制作過程を振り返り、より良い表現を目指すことが期待できる。制作中の工夫や試行錯誤、感じたことを記入し、自己評価をすることで次の表現活動に繋げる。その際、学習端末の「ロイロノート」を活用し、写真と文字で制作過程を記録する。文字入力には音声入力を推奨する。自分の想いを話す形式で記すことで、文章を書くストレスが軽減され、表現の幅が広がる。また、レポートを学級で共有することで、他児童のアイデアに触れ、相互に学び合う機会が増え、表現の多様性が促進され则认为る。

(4) 指導計画 (図1)



(5) 指導の実践1【抽出児童A】

1時の様子 (イメージをもつ)

① 制作のアイデア段階

授業の導入で「穴を開けてみよう」と指示を出すと、A児は「穴を開けてから考えるのではなく、作りながら穴を開けてもいいですか?」と質問した。理由を尋ねると、最適な位置に穴を開けたいが、一度開けるとやり直せないため慎重に進めたいとのことだった。A児の頭にはすでに穴の中の世界が広がっており、表現したい世界に合った穴を開けたいという強い意向があったため、それを尊重した。A児を抽出児として観察することにした。

② クラゲチャートによる構想と混色による土の表現

A児は早速クラゲチャートを作成し、「土の中でモグラが楽しく暮らす部屋」を表現することに決め、その世界に関連するキーワードを書き込んだ(図2)。

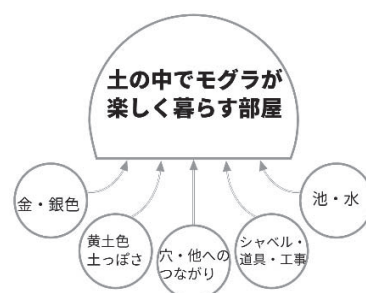



図2：A児のクラゲチャート

2時の様子(“土っぽさ”の追求)

A児は土を表現するために絵の具を用意し、赤、黄、茶などの色をパレットに取り出して、色作りと着色に没頭した。単に色を塗るのではなく、色のバランスや質感を意識して、独自の表現を追求していた。A児の着色からも図工における知識と技能の高さがうかがえた。阿部(2020)は「図画工作科で目指す『知識』は、『身体知』というような『身に付く知識』です。(中略)低学年では『形や色にはいろいろある』ことの理解を『気付く』という文言で表しています。単に『赤、青』などの呼称を覚えるではありません。表現や鑑賞の活動を通して形や色の違いを捉えながら『形や色の概念の基礎』を形成することを指しています。中学年では形や色から派生する『感じ』もあること、これらの上に立って高学年では、『造形的な特徴』を捉え表現に活かしたり鑑賞するときの手がかりにしたりする『造形的な視点』をもつことなのです」と述べている。



うまくいっていること・悩み

土の色をぬる時に、色が場所によって違うので、色をそろえるのが大変だと感じました。いつも絵を描くときには、同じ色で塗りたいと思っていたけれど、塗りむらみたいなのが本物みたいに思えて、これでもいい表現かもしれないと思い、その後はあえてちょっと違う色や筆あとを残したりして進めました。もぐらの表情どうしようかなあ。楽しい世界にしよう。

授業時間にやったこと

私はまず、箱の中をどんな部屋にするか考えてアイデアを出しました。穴をのぞいた世界なので土の中を想像しました。だから土の中のモグラの部屋にしたいと思いました。絵の具で、土の色の茶色に塗りました。

次の制作でやりたいこと

次やりたいことは、少し薄暗くしたいので、狭き穴と光の入る小さい穴を作りたいです。あと、時間があれば色塗りを完成させたいです。

図3：A児の制作レポート(2時)

A児は、単に茶色の絵の具を使うのではなく、混色で“土っぽさ”を表現しようとしていた。この姿勢から、A児が感覚や知識を活かし土の中の世界を探索していたことがわかる。制作レポートからも、制作中の思考過程が伝わってくる(図3)。A児は当初、単色で塗ろうとしたが上手くいかず、塗りむらや筆跡がむしろ表現に合っていると感じその特徴を活かすことにした。A児が“土っぽさ”を追求し、経験を生かして制作を進めていたことが分かる。

3時・4時・5時の様子（世界観の実現に向けた問題解決過程）
<p>3時、A児は土の色を塗り終えた後、カッターで覗き穴を開けた。最初は小さく開け、徐々に自分が納得のいくサイズに調整していった。「中を覗くと真っ暗でした。だから上や横にも小さな穴を開けました（図4）」という言葉からも、A児が採光の必要性を感じながら制作を進めていたことがわかる。また、次時の計画には「何を作るか家で考える」と記し、A児は休み時間に土の中の世界に関連する絵本を読むなどして、世界観を広げていた。制作時間以外にも、箱の中の世界に想いを巡らせていた。</p>
<p>制作レポート（図5）を見ると、A児がモグラを紙粘土で作る際、接着が上手くいかず苦戦していたことがわかる。私は授業中にこの点を見落としていた。授業後にA児に尋ねると、これまでの図工の授業では紙粘土で形を作ることは経験していたものの、ボンドで接着する経験はなかったことが判明した。そこで、次の授業（5時）では、紙粘土はボンドで接着できることを確認しながら授業を進めた。同様の悩みを抱えていた他の児童もあり、制作レポートから支援のヒントが得られたと感じた。A児をはじめ、他の児童にも紙粘土の接着方法を改めて説明し、具体的な技法を共有することで、クラス全体の制作活動がよりスムーズに進んだ。また、A児は制作中、箱の中を覗きながら小石やはしごの位置を調整していた（図5）。覗き穴の手前に物を置きたかったが、穴から覗いても見えないことに悩んでいた。A児に尋ねると、「○○さんみたいに他の面にも覗き穴を作れば、別の角度から見えるし、暗くて棚の絵が見えないから、大きな窓も作りたい」と語った。3時から続いていた明るさの調整は、その後も続き、当初は「土の中の世界だから暗くしたい」という意図があったものの、暗すぎて箱の中が見えなかったため、横にも大きな穴を開けて光を取り込むことにした。しかし、土の中の世界観を保つため、赤いカラーセロハンに茶色のペンで色を加え、A児は“土っぽさ”を工夫して表現していた（図6）。この一連の行動からは、A児が単に「光を入れる」という表面的な解決ではなく、テーマや世界観を意識しながら問題を解決し、表現に深みをもたせようとする姿勢が感じられた。</p>
6時の様子（仕上げ・完成後の制作レポート作成）
<p>A児は箱の中の世界を調整した。小石の配置を工夫したり、ミミズを紙粘土で作成したり、さらに絵を加えたりして作品を完成させた。完成後に作成した制作レポート（図7）からは、A児が単に作品を作っただけでなく、作品内に広がる世界や物語が存在していることが伝わってくる。例えば、モグラやミミズ、風船といった要素は単なる装飾ではなく、それぞれに意味や背景をもつストーリーが込められている。モグラの表情や、土の中でのミミズとの友情、祭りでもらった風船など、A児は自らの想像力を作品に反映し、物語を紡ぎ出している。こうした表現から、A児の作品に対する愛着や深い理解が感じられる。</p>

（6）指導の実際2【抽出児童B】

1時の様子（イメージをもつ）
<p>① B児について</p> <p>B児は、4月より図画工作科に対して非常に強い苦手意識をもっており、抽出児としてその成長を観察することにした。アンケートでは、図画工作科について「とても嫌い」と回答し、工作や絵を描く活動にも同様の感情を抱いていた。また、「何を作ればいいのか分からない」「自分は下手だからできない」といった自己否定的な考えが強く、その結果、授業に積極的に取り組む</p>

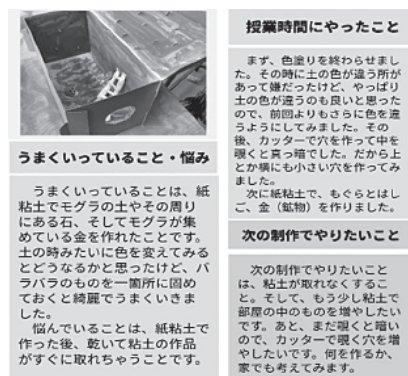


図4：A児の制作レポート（3時）

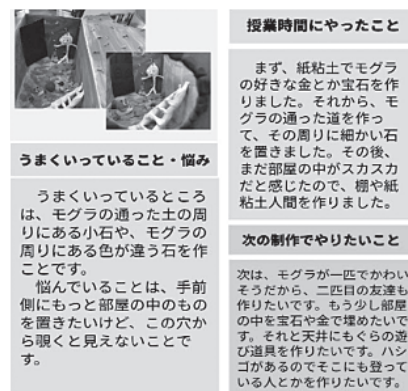


図5：A児の制作レポート（4時）

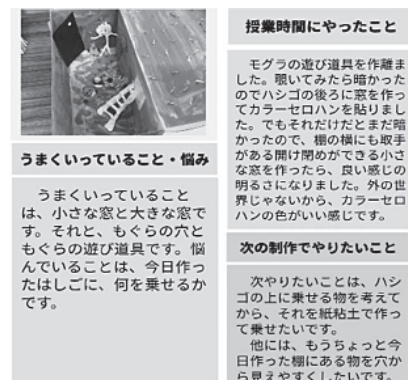


図6：A児の制作レポート（5時）

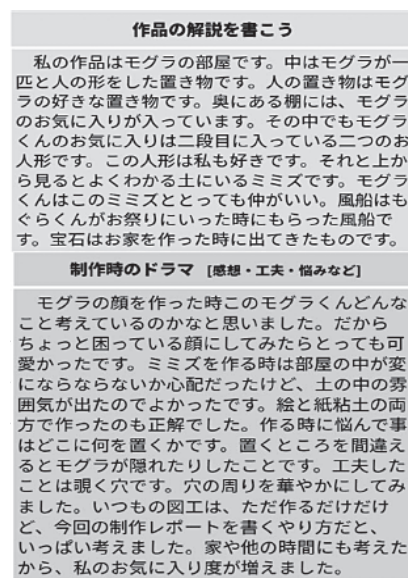


図7：A児の制作レポート「解説」（6時）

姿勢が見られなかった。例えば、4月の学級開きの際、学級目標を飾る自分のキャラクターを描く活動でも、B児はキャラクターを描くことを避け、机に突っ伏して一切手を動かさなかった。彼にとって図工の授業は、「自分にはできない」という不安と苦手意識が先立ち、挑戦が難しい領域であることが明白であった。

② B児のアイデア段階〔クラゲチャート〕

授業の導入で「穴を開けてみよう」と指示を出した際、B児は動けずにいた。私がカッターを差し出し、作業を促すと、B児は定規で慎重に線を引き、3cmの正方形の穴を開けた。その後、再び何を表現するか悩み、クラゲチャートの記入が進まなかった。しばらくして「真っ暗にしたい」と呟いた。この言葉を受け、「どんな感じの真っ暗？」と問いかけると「夜みたい」と返答した。この対話をきっかけに「夜の世界」をテーマに決めたが、さらに他の要素について考えるよう促しても、星と電柱以外のアイデアは出ずに、苦労していた(図8)。

2時・3時・5時の様子(自己調整学習によるB児の変容) (第4時欠席)

B児の制作の初めは、「何を作ればいいのかわからない(図9)」という焦りと自己評価の低さが目立ち、「早く終わらせたい」と何度も呟いていたが、黒い絵の具で箱の内側を丁寧に塗り進める姿からは、納得のいく作品を作りたいという気持ちが感じられた。「黒い世界にはどんなものがあるといいか考えてみよう」と声をかけたものの、その日の制作レポートには次に表現したいものを記述することができなかった。制作レポートを互いに見合える設定にしたことで、B児は級友の作品を参考に「次は建物を作る」と自らの表現に取り組む姿勢が見られた。

3時、4時の制作を通して少しずつ自信が芽生え、表現への意識が変化していった様子で、紙粘土でビルを作り、採光用の星形の穴を開けるなど、B児の世界観は広がっていった。特に5時には、タブレットのライトを使って作品を照らした際、「うわー、すげー僕の作品!」と喜びの声を上げた。B児は、作品に開けた穴から光を入れることで、その光が作り出す影の変化に注目していた。照らす角度によって影が異なり、時間や場所が変わったかのように見えることに気付いていた。B児は「見方で変わる世界(図12)」という新しい発想を得た。

B児の制作レポートからは、彼の表現力と自己調整力の成長が見られ、最終的な作品に対する愛着と達成感が見られた。「みんなに見てもらってうれしかったです。」(図12)という言葉から、自分の作品に対する満足感や達成感が彼の中で深まったことがわかる。B児は、苦手意識をもちながらも、レポートと制作の往還による自己調整学習を通じて自分自身の表現を磨いていった。このプロセスは、図画工作科における自己表現の探求が自信の形成につながったことを示しており、指導の有効性を裏付ける事例であると言える。

5 考察

(1) 自己調整学習の効果と児童の表現力向上

自己調整学習を取り入れた制作活動を通じて児童が自分の制作過程を振り返り、自己評価を行うことで、表現の深まりが見られた。レポートに、制作中の工夫や悩みを記録することで、児童は自分の思考を整理し、次の課題に向けた具体的な目標を立てることができた。特に、制作過程で「自分で考え、自分で修正し、試行錯誤する」というプロセスを繰り返すことで、児童は自己表現に

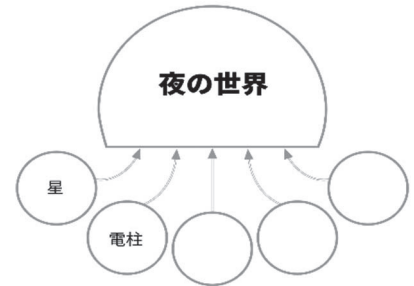


図8: B児のクラゲチャート

	授業時間に行ったこと
	次で制作でやりたいこと

図9: B児の制作レポート(2時)

	授業時間に行ったこと
	次で制作でやりたいこと

図10: B児の制作レポート(3時)

	授業時間に行ったこと
	次で制作でやりたいこと

図11: B児の制作レポート(4時)

作品の解説を書こう	
僕の作品は見方によって変わる世界です。「見る角度によって、いろんな見方があるね」と先生が言っていてその言葉が心に残ったからです。暗い世界に見えるけれど、ひと工夫をすると、明るくなります。それは、タブレットのライトを使って光を入れることです。そうすることで、中の柱の影の向きも代わり、1日の流れみたいになります。	
制作時のドラマ【感想・工夫・悩みなど】	
最初は「夜の世界」にしようと思ったけど穴を開けてカラーセロハンをつけたい感じになったからどんどん変わっていききました。早く完成させたかったけど、やっていくうちに、もう少し続けました。タブレットの光を入れたとき、すごい感じと思った。みんなに見てもらってうれしかったです。	

図12: B児の制作レポート「解説」(5時)

対する自信を深め、主体的に取り組む姿勢が育まれた。この点は、自己調整学習が単なる作業の振り返りだけでなく、児童が作品と自己とに対峙し、作品を作り変える過程で自分をつくり変え、成長に繋げる上で有効であることを示している。

(2) A児の成長過程から見える自己調整学習の有効性

A児の制作活動を通じて、自己調整学習の有効性が確認された。A児は自分のテーマに合わせた材料や技法を選び、独自の表現を深め、表現力を大きく向上させた。また、制作レポートを通じて制作過程を振り返り、次のステップを自ら考える姿勢が見られた。これにより表現の改善や自信が形成され、より良い作品を作る意欲が高まった。さらに、自己調整学習によって問題を発見し、自ら解決する力を養い、指示を待たずに制作に取り組む自立的な学習態度も見られた。A児はテーマにこだわりをもち、自己表現を追求し続け、そこに表現への主体性が育まれた。これにより、自己調整学習が表現力や自立性を高め、主体的な学びを促す効果的な手法であることが示された。

(3) B児の変容から見える自己調整学習の有効性

B児は当初、表現に強い苦手意識を抱いており、アイデアを出す段階でも消極的であった。しかし、制作レポートや自己調整学習を通じて、表現に対する意識が変わっていった。彼は「夜の世界」というテーマから「見る角度で変わる世界」へと発展させる中で、タブレットのライトを使って光と影を表現するなど、自ら表現方法を見出していった。この体験がB児の自己肯定感を高め、苦手意識を克服するきっかけとなった。自己調整学習は、B児のように表現に対する不安を抱える児童に対しても、表現行為の過程で自分の表現を見出し、創造し成り立たせていく自己解決能力や前向きな姿勢を育む有効な手法であることが確認できた。

(4) 教師の指導における自己調整学習の活用

自己調整学習の導入で、個々の児童の制作過程や思考の変化をリアルに把握でき、よりの確な支援を対話や活動ですることが可能になった。制作レポートを活用することで、児童の工夫や困難に直面した場面が明確に記録され、教師はその情報を基に指導を行うことができた。特にB児のケースでは、本人が制作過程で悩んでいた問題に対して、教師が適切にサポートすることで、B児の自己表現が広がり、作品に対する愛着も深まった。教師が児童の思考過程に寄り添いながら支援することが、児童の表現力を引き出すために効果的であることが確認できた。指導をする際、特に制作時やレポート作成時に多くの児童と対話を重ねた。制作レポートは、児童の考えや悩みが具体的に表れるため、教師として児童の思考や制作の進行状況を把握する良い機会となり、対話のきっかけが豊富にあった。これにより、児童の意図や課題に対して適切な支援を行うことができ、指導の質が向上した。また、児童一人一人の個別の課題に応じた指導が可能となり、全体としても、指導の改善につながった点が今回の実践の成果であると感じた。

(5) 今後の指導への示唆

自己調整学習の導入は、児童が自らの表現活動を通じて自己評価を行い、表現に対する自信をもつための重要な手立てであると言える。特に、制作過程での表現行為や工夫を振り返ることが、次の表現活動に繋がる効果を示しており、教師はこれを積極的に活用すると良いと感じた。絵画表現でも効果があると感じるため、今後は絵画制作の際にも導入し、その効果を探っていきたい。自己調整学習を通じて児童一人一人が自らのペースで成長できるよう、個別の支援と全体の成長を両立させる指導が求められる。

参考・引用文献

- ・ P.1 (3) 中央教育審議会の「教育課程部会における審議のまとめ」(2021)
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_kyoiku01-000012344_1.pdf, 2024.7.30
- ・ 阿部宏行 (2020)『図工を通して子どもがもっと好きになる評価のABC』, 日本文教出版
- ・ 市川安紀 (2020)『図画工作科の学びにおける、子どもたちの思いを膨らませる教師の働きかけ』, 山梨大学教職大学院教育実践研究報告書
- ・ 梅澤尚子 (2008)『自分を見つめる行為に価値をおいた造形活動－高学年における平面と立体の3つの実践より－』, 上越教育大学実践研究センター実践研究集第18集
- ・ 蓑手章吾 (2021)『子どもが自ら学び出す！自由進度学習のはじめかた』, 学陽書房
- ・ 文部科学省 (2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作科編』, 日本文教出版